

院政・鎌倉時代の副詞語彙

佐々木

峻

目次

はじめに

- 一、八文献共通語彙
- 二、七文献共通語彙
- 三、六文献共通語彙
- 四、五文献共通語彙
- 五、四文献共通語彙
- 六、三文献共通語彙
- 七、二文献共通語彙
- 八、単一文献孤存語彙

おわりに

はじめに

語彙を品詞別に眺めた場合、副詞語彙は、文献資料(作品)の素材に左右されることの比較的少ない品詞であり、且つ、文献資料の個性を最もよく示すものの一つとして注目される。⁽¹⁾

右の理由に基き、院政・鎌倉時代の文献資料八点を選び、それらに認められる全副詞語彙を調査して、文献相互に共通するもの（共通語彙）と孤立するもの（孤存語彙）との状況を明らかにしてみたい。

今回取上げた資料は、片仮名交り文資料が五点、平仮名交り文資料が二点、和化漢文資料が一点の、計八点である。

〈片仮名交り文資料〉

○法律百座聞書抄 院政末期書写本 法隆寺蔵（小林芳規編『法華百座聞書抄総索引』 昭和五十年二月 武蔵野書院刊）

○打聞集 長承三年（一一三四）頃書写本 京都国立博物館蔵（東辻保和著『打聞集の研究と総索引』 昭和五十六年

一月 清文堂出版刊）

○三教指帰注 院政末期書写本 中山法華経寺蔵（築島裕編『中山法華経寺蔵本三教指帰注総索引及び研究』 昭和五十五年八月

武蔵野書院刊）

○却廢忘記 文暦二年（一一三五）書写本 高山寺蔵（高山寺資料叢書第七冊『明恵上人資料第二』 昭和五十三年三

月 東京大学出版会刊）

○光言句義釈聴集記 正元元年（一二五九）校本（同右）

〈平仮名交り文資料〉

○古本説話集 鎌倉中期頃成立 梅沢彦太郎氏蔵（山内洋一郎編『古本説話集総索引』 昭和四十四年四月 風間書房

刊）

○宇治拾遺物語 建保六年（一二二八）頃成立（本文は、日本古典文学大系本に拠る。総索引は、境田四郎監修『宇治拾

遺物語総索引』〈昭和五十年二月 清文堂出版刊〉を用いた。）

〈和化漢文資料〉

○高山寺本古往来 元暦元年（一一八四）頃書写本 高山寺蔵（高山寺資料叢書第二冊『高山寺本古往来 表白集』 昭和

一、八文献共通語彙

本稿で取上げた八文献に共通する副詞語彙は、「かく」「きはめて」「また」の3語である。各文献ごとの用例数は、表1の如くである。(文献名は、略称とする。)

語彙		文献		
		法	打	三却光古宇高
かく此・斯	14	25	9	3
きはめて	4	6	1	2
また	20	8	3	9
		36	1	74
		113	10	197
		4	1	17

(表 1)

いずれも、語義上、一般性の高いものばかりである。用例数の多・少の問題は、文献ごとの言語量の差があるので、今は問わないこととする。

「きはめて」が、『古本説話集』や『宇治拾遺物語』に少ないのは、この二文献に「いと」が多用されている(表4参照)ことと表裏の関係にあらう。なお、「はなはだ」は、『法華百座聞書抄』と『高山寺本古往来』にのみ用いられている。(表7参照)『古本説話集』と『宇治拾遺物語』の「きはめて」の例を、各一例掲げておく。

○ぎえはきはめてめでたけれど、みめはいとしもなし。(古本説話集 匡衡の和哥の事第四 地の文 28・4)
同一文中に、「きはめて」と「いと」とが共存している。

○これも今は昔、山の横川に、賀能ち院といふ僧、きはめてはかいむぎんの者にて、昼夜に仏の物をとりつかふこと
をのみしけり。(宇治拾遺物語 山横川能地藏事卷五ノ三 地の文 193・1)

二、七文献共通語彙

七文献共通語彙は8語、その内訳は、左の如くである。

〈『高山寺本古往来』にのみ存しないもの〉

さらに すべて

〈『古本説話集』にのみ存しないもの〉

すでに

〈『却癡忘記』にのみ存しないもの〉

いまだ いよいよ すなはち

〈『三教指帰注』にのみ存しないもの〉

かならず まことに

以上全体を表示すれば、表2の如くである。

右の8語は、修飾表現法上、かなり重要な地位を占めるものと思われるが、これらが、特定文献に見られないことは、注目すべきであろう。

語彙		文献						
さらに	すべて	すでに	いまだ	いよいよ	すなはち	かならず	まことに	
17	1	5	2	12	1	6	9	法
3	3	4	2	3	1	2	8	打
4	1	1	1	3				三
2	10	1			3	1	1	却
7	1	3	1	2	1	4	3	光
13	1		3	6	2	15	20	古
18	9	14	25	20	13	36	68	宇
16	10	6	1	9	5			高

(表 2)

三、六文献共通語彙

六文献共通語彙は、「たちまちに」以下の9語である。その全体状況は、表3の如くである。

語彙	文献								
	法	打	三	却	光	古	宇	高	
たちまちに	6	1	1						
いくら(も)	5	1	1		2	2			
すこし(も)	2	4	1		1	24	1	12	
なほ	11	4	3			14	43	66	3
やうやう	4	5			1	14	21		
ただ	39	26		1	37	61	168		10
つねに	3				4	6	17		
ともに		1	4		2	3	9		1
まづ			3	3	12	6	28		7

(表 3)

右では、『却癡忘記』と『高山寺本古往来』とが、各4語で最も少ない。総言語量の少ないこともその原因となつていようが、一面、叙述法の単調・簡素であることも関係しているのではないか。

四、五文献共通語彙

全部で16語ある。非存という点に着目すれば、「いと」「え」の2語が、『三教指帰注』『光言句義釈聴集記』『高山寺本古往来』の三文献に存しない点が注目されよう。

存・不存の全体状況は、表4の如くである。

語彙	文献
あまた	法 打 三 却 光 古 字 高
もし	4 3 2 1
いと(しも)	3 6 1 6 32
え	15 17 2 91
しばらく	1 4 2 5
かくて	3 4 1
げに(も)	1 3 20
しばし	5 4 6 14
ことごとく	10 1 1 3 66
いささか	1 2 2 7
なかなか	1 4 2 3
おのづから	5 3 4 17
ひとへに	3 2 2 10
かへりて	1 1 3 7
かへすがへす	1 1 1
ときじき	1 2 3 14 1

(表 4)

『法華百座聞書抄』の「え」の一例は、打消しの呼応語を伴わない例である。

○阿耨タラ三藐三菩ヲエ給ヒテ、トコロくニ六方ニ浄土ヲエウケ給ヒテ、諸ノ井声聞ノタメニ、説ノリヲ説トキ給ヘリキ。(ウ

269)

文意を汲めば、「マウケ」の「マ」の誤写と見るべきものか。⁽²⁾

『光言句義釈聴集記』の「しばし」には、声点が差されている。

○シ・(平)ハ(上濁)シ・(平)タ、カヤウニ知リナハ、イトマ

アリテ通世トムセハ誠マコトにシツカニテ所作アルヘシ。(下略)

本文献には、他にも声点付和語が見られるが、これら、特定語に声点を付した意図は未詳である。

五、四文献共通語彙

異なり語数は23語である。これらのうち、10語以上を占めるものが、『光言句義釈聴集記』『古本説話集』『宇治拾遺物語』の三文献である。

『高山寺本古往来』には、5語しか認められないが、それらのうち、「さだめて」「もとも」「ことに(殊)」「いはむや」の4語は、他の文献に比べ、総言語量の割りに出現頻度が高い。『高山寺本古往来』の文体的特徴を支える重要な副詞語彙として、注目に値する。

存・非存の全体状況は、次表(表5)の如くである。

	語彙		文献	
	存在	非存在	法	打
たがひに	2	5	1	4
いかに	1	2	1	1
いくばく(も)	3	5	1	2
かうかう斯々	1	1	1	0
さ然	9	5	1	4
たびたび	2	1	1	1
など(か)	3	1	1	2
つひに	2	1	1	1
さだめて	3	2	1	1
おほよそ	1	1	1	0
たとひ	1	1	1	0
まして	16	2	1	2
やがて	2	1	1	1
よに	1	6	1	2
いかが	1	2	1	1
みな	6	2	1	1
もとも	1	25	1	3
さも	30	4	1	2
ことに殊	1	2	1	1
いちぢやう一定	1	1	1	1
とかく(も)	1	1	1	1

(表 5)

六、三文献共通語彙

異なり語数は20語である。(表6参照)

語彙	法	打	三	却	光	古	宇	高
かばかり	1	1						
むねと	3	1						
しか然	2	1						
はじめて	2			1	1			
たたいま	1							
たちどころに	1							
いくたび	2				1			
まだ	3							
とばかり	1							
やをら	2	1						
いかさまにも								
さて								
なへ禁止								
よくよく	2	4	1					
ずいぶん	2	5		2				
	1	3	1	10	1			
		2		8		11	3	12
	1	21		1	7	14	1	3
								5

(表 6)

よも
いはむや

1
3 1
1 2
1 15
4

ふつと					
おほかた			1	2	
みづから			1		1
かねて			1	6	
たまたま	1	2	1	8	10
				34	1
			10	3	

『宇治拾遺物語』での「いくたび」の例は、「筆策」を詠み込んだ物名歌の例である。

○めぐりくる春々ごとに桜花いくたび、ちりき、人にとはばや（木こり小童隠題歌の事巻二ノ二 343・2）

擬態語「ふつと」が、『却癡忘記』『光言句義釈聴集記』に見られる。

○コノチヤウナラハ、コレヨリノチノ師将フツトアルマシキ事也。（却癡忘記 上9オ5）

○又、關伽水ナトハ、我ハ昔ハフツト人ニハトラセス、イカニモ自作トリキ。（同右 下1オ5）

○仍テ是カ大事ニテ心得ネハフツト心得ラレス。（光言句義釈聴集記 上284）

共に、明恵上人関係の文献である。明恵上人独特の用語である可能性もある。

擬声・擬態語のような具体的な表現機能に富む語彙が、共通度の低いのも当然のことであろう。以下の二文献共通語彙及び単一文献孤存語彙に、これらが多数見られるのも、至極当然のことと思われる。

七、二文献共通語彙

まず、全体の状況を表示する。（表7 見出し語に傍線を付したものが、擬声・擬態語である。）

あつあつと厚々
 いかにか
 いくほど
 いっしか
 いとど
 えもいはず
 かつがつと
 きと
 きらきらと
 こそろと
 さすがに
 さながら
 なは
 なはなはと
 そころ
 そよそよと
 つくづくと
 つゆ
 とてもかくても
 ともかくも
 はるばると
 ぶと
 ほのほのと
 やれやれと破々

1 1 1 1 1 1 15 1 1 2 2 3 2 5 2 3 3 1 23 5 9 1 24 1
 1 2 9 5 7 1 25 2 1 5 1 23 5 7 1 5 14 1 18 19 7 3 161 1

ゆきゆきと	
わびと	
あへて	1 1
およそ	
とにかくに	2 1 1 8 10 1
まさに	6 2 1 1

まず、『光言句義釈聴集記』の声点付和語の例を掲げておく。

○是等ヲ心ロ不_ニ得_レシテト・(平)・モ(上)ス・(平)レ・(平)ハ…平過文点ヲヨムナント云テナニトモナクヨムハ、夕、我口_タカマシキ也。(上34)

擬声・擬態語は、全部で14語ある。それらのうち、「つぶと」が『打聞集』と『古本説話集』とに存し、「はたと」が『打聞集』と『宇治拾遺物語』とに存し、「ちちと」「ひしと」が『却癡忘記』と『光言句義釈聴集記』とに存し、「はたはたと」が『光言句義釈聴集記』『宇治拾遺物語』に、「きと」「きらきらと」「こそろと」「さはさはと」「そよそよと」「つくづくと」「ふと」「ほのぼのと」「ゆさゆさと」の9語が、『古本説話集』と『宇治拾遺物語』とに共通して存する。各用例のいくらかを、簡略に示す。

〔つぶと〕

○ツブト申ベキ事(打聞集 109)

○つぶとあたりて(古本説話集 129・6)

〔はたと〕

○ハタトナリテ(打聞集 410)

○はたとうちあげて(宇治拾遺物語 122・11)

○はたとうち(同右 302・14)

○はたと鳴りて(同右 337・3)

〔ちちと〕

○チ、トセサセ給ヨシヲ(却癡忘記 上11オ5)

○チ、ト如此_シ書セル人(光言句義釈聴集記 上549)

[ひんと]

○ヒシトチリタル(却癡忘記 上18ウ5)

○ヒシト生シタル也。(光言句義釈聴集記 下72)

[はたはたと]

○アマリ・ハ(モタ・平)くトシテヒソメクホトニ(光言句義釈聴集記 上75)

○戸をはたくとたくけるに(宇治拾遺物語 101・15)

○牛の尻をはたくと打て(同右 340・12)

[きん]

○きと御らんじけり。(古本説話集 171・1)

○きと見いれ奉るによりて(宇治拾遺物語 67・12)

[こそろと]

○こそろとのぼりぬ。(古本説話集 229・1)

○こそろとわたりて(宇治拾遺物語 229・4)

[ゆめゆめと]

○ゆめととゆるぐ。(古本説話集 234・2)

○ゆめととゆるぐ。(宇治拾遺物語 239・3)

以上の如く、『古本説話集』と『宇治拾遺物語』とに擬声・擬態の副詞が多用され、且つ、共通するものが多いことは、注目に値しよう。

八、単一文献孤存語彙

八文献中、一文献にのみ認められる孤立的な副詞語彙は、左の如くである。

- (1) 『法華百座聞書抄』孤存語彙（アラビア数字は用例数を表す。傍線を付したものは、擬声・擬態語であることを表す。以下同じ。）

あけくれ(1) いくそばく(2) いけながら(3) おほきに(3) げんに(2) ことごと(1)
 たとへば(2) つぎに(2) とりわき(2) なのゆゑに(4) ひそかに(1) まさしく(2)

以上、異なり語数は12語である。

- (2) 『打聞集』孤存語彙

いちじに(1) かうて(2) かやうに(1) ここに(1) さやうに(1) しゆじゆ(2) す
(一時)
 すに(1) そそ(1) たえて(2) たた(1) ついでに(1) とく(1) とぎまかうぎま
(後)
 に(1) やくと(1)

以上、異なり語数は14語である。それらのうち、擬声・擬態語は2語である。それぞれの用例を左に掲げる。

- 香爐之煙ス、ニ上サマニ立登ル。(56) (原本「**〇**登立」)

- ソ、風吹。(248)

- (3) 『三教指帰注』孤存語彙

いまひとつ(1) きやめて(1) (生々) しゃうじやうせぜ(1) (切々) せつせつ(1) (即時) そくじに(1) なじ
 に(1) ほろほろと(2) (世々) むさむさと(1)

以上、8語である。擬声・擬態語の用例を左に掲げる。

○鶉毛ハホ六くトシテ (4オ7)

○穴村ホロくトコホレヲチヌ。(27オ7)

(4) 『却廢忘記』 孤存語彙

異なり語数は15語である。

あひかまへて (4) いささかも (1) ^(一切)いつさい (1) かせかせと (1) からからと (1) ^(早々)さうさ

う (1) じねんに (1) たいてい (1) たぶん (1) ^(度々)どど (1) なにかは (2) なにとな

く (1) ひまひまに (1) まなあたり (1) みるみると (1)

擬声・擬態語の用例は、左の如くである。

○アマリニ学問タケクナリヌレバ (中略) カセくトノミナリモテイテ (上5ウ8)

○タゞ一向ニカラくトヲコナヒテオハシマシアフベシ。(上14ウ4)

○シキミノ花ノミルくトシテ (下1オ13)

(5) 『光言句義釈聴集記』 孤存語彙

異なり語数は20語である。

あちこち (2) いかほど (1) ^(内々)うちうち (1) おほむね (1) しだいしだいに (1) ^(世々)せぜしや

^(生々)うじやう (1) ^(暗)そらに (1) たちまち (1) ちやうちやうと (3) ながながと (1) なんぞ (1)

^(私)ほつと (2) ほつほつと (1) みそみそと (1) みだりに (1) やうやうに (2) ^(應)やがた (1)

わたくしに (1) わづかに (1) るりると (1)

擬声・擬態語の用例は、左の如くである。

○チヤウくトシテ物ヲナツケテ論ヌ。(上262)

○チャウくト図ガアリテヤスキ也。(上285)

○何^ニハナントチャウくト心得ベキ也。(上348)

○ホツト中生ルレバ(下69)

○ホツくト仰セラル、事ドモハ(上419)

○ミソくト物ヲ申シナスナリ。(上266)

○即チ上ニ^平・^平リ・^平くト云ヒツルヲ(上326)

擬声・擬態語ではないが、「やがて」と同義と見られる「やがた」の例を掲げておく。

○余レバ花^ニハ頓漸竝説ヲ深キニシテ其ニヤカタ即身成仏トモ云也。(下100)

(6) 『古本説話集』孤存語彙

あからさまに(1) ありのままに(2) いかがは(7) いかにか(2) いかにして(5) いかによ

(3) いかにも(5) いまさらに(1) いまに(4) うちつけに(1) おしはかりに(1) おの

おの(2) かう^斯(2) かつは(1) かはるがはる(1) からうじて(2) きやうきやうに(1) さ

くちぐちに(1) ころろならず(1) こぞりて(2) ことは(1) さしも(1) さぞ(1) さ

なむ(1) さのみ(3) さまさま(5) さまで(1) しこら^二こら^一(1) そこばく(1) そよと^一(1)

たえず(1) ちりぢりに(1) とうど(1) とくとく^{疾々}(2) とみに(1) とりどりに(2) なくな^{泣々}

く(8) なじか(1) なにしか(は)(2) なにしに(1) すべて(2) ねんごろに(2) ひた

ぶるに(2) ひとしれず(1) ひめもずに(1) ふいに(1) べちに^別(1) まいて(1) まごこ

ろに(1) まだに^未(1) みちすがら(1) やはら(1) ゆめに(1) われにもあらず(1)

以上、異なり語数は54語、それらのうち、擬声・擬態語は2語と、比較的僅少である。用例は左の如くである。

おうしろにそよとなりて、人のけしき、あしをとす。(290・3)

〇さてみれば、やうくとびて、かうちのくにに、このひじりのおこなふかたわらにとうどをちぬ。(235・3)

(7) 『宇治拾遺物語』孤存語彙

異なり語数は94語で、八文獻中最多である。

あまたかへり(1)	あまたたび(2)	ありありて(1)	いかさま(1)	いくいくと(1)	いくかし
ら(1)	いくつ(2)	いくとせ(1)	らつ(10)	いまなむら(1)	おろおろ(4)
かろがると(1)	きしきしと(1)	きはまりて(2)	きりきりと(1)	くだくたと(4)	くつくつ
と(1)	くらぐら(2)	けしけしと(1)	こころと(1)	こそこそと(3)	ことのほか(16)
と(1)	こまこまと(3)	こまこま(1)	かくかくと(1)	かくと(1)	なつと(2)
と(1)	おびりり(1)	おめめと(3)	なやなやと(1)	なやな(1)	なつと(4)
かも(1)	しだいに(4)	しひて(2)	すはすはと(1)	するすると(1)	そとそと(1)
だかと(2)	ただただと(1)	ちうと(1)	ちと(2)	つきつき(3)	つと(1)
つざりと(2)	つやつや(1)	つらつらと(1)	てじから(2)	てじからみづから(2)	と(3)
うと(1)	ところとと(1)	なかに(5)	なじかは(1)	なぞ(2)	なにか(3)
なほなほ(1)	なよなよと(1)	なんてふ(9)	のけがまた(8)	のちのち(2)	はた(1)
らはらと(7)	はるはる(1)	ひしひしと(3)	ひやうと(1)	ふたと(1)	ふたふたと(2)
たりと(1)	まれまれ(1)	みさみさと(1)	みちみち(1)	みなみな(2)	むずむずと(1)
やくやくと(1)	やや(3)	ゆふゆふと(1)	ゆるゆると(1)	よなよな(1)	よによに(3)

(世々)
よよ(1) よるよる(1) よろづに(6)

擬声・擬態語も38語と、多数を占める。用例は左の如くである。

- きし〜とひきければ(391・6)
- まだらなる蛇のきり〜としてゐたれば(158・16)
- くた〜としてよりふしにけり。(121・5)
- 練絹のやうにくた〜と成たるものを(338・12)
- せばねを打きりてくた〜となしつ。(353・1)
- なへ〜くた〜となして(356・13)
- のどをくつ〜とくつめくやうにならせば(297・6)
- 腹をそらしてけし〜とおこしければ(72・11)
- こそ〜と登りぬ。(204・6)
- 法師こそ〜として入くるままに(271・4)
- 手をこそ〜とすりて(302・3)
- 弟子の聖はつしたればさかさまに入りてごぶ〜とするを(325・4)
- 此釜にさく〜と入る。(84・4)
- 湯ぶねにさく〜とのけぎまに臥ことをぞし給ける。(126・1)
- 一どにさつと失せぬ。(257・12)
- 水中に血のさつとわき出づる様に(391・12)
- さ〜と見てあるに(94・13)

- 川にさぶりと入程に(325・2)
- さめくと泣きけるをみて(71・6)
- さめくと泣く。(213・15)
- さめくと二人泣きて(250・13)
- 衣が さやくとなりて(401・7)
- さらくとかへらかして(84・9)
- 算をさらくと出しければ(409・6)
- さんをさらくと置きあたりけり。(409・8)
- さむをさらくとおしこほちたりければ(410・2)
- 腰にすはくとうちつれたり。(63・5)
- するくと生たちていみじく大になりたり。(145・3)
- この男が顔をそとくなでけり。(356・6)
- たくと走り出でられにけり。(122・4)
- ちうと立ちめぐりて尻をふたと蹴たりければ(388・16)
- 少将つといだきて(101・13)
- づぶりとなげ返しぬ。(124・10)
- づぶりとも入らで(325・3)
- われをつらくと見て云やう(76・13)
- 聖の坊のかたはらにどうとおちぬ。(329・11)

- へ矢をとろくとはなちて(418・12)
- 二たび三たびばかり打ふりてなよくとなして(129・7)
- へ馬よりはらくおるゝ程に(80・12)
- 石をはらくとくだけば(259・8)
- はらくと泣きけり。(272・13)
- 涙をはらくとこぼして(302・4)
- はらくと泣きまどひしを(305・3)
- 涙をはらくとおとして(336・4)
- 川にはらくと打入て(415・2)
- ひしくとたゞ食ひに食ふ音のしければ(70・15)
- ひしくとす。(73・16)
- ふたりねたる上をひしくとふみならして(280・1)
- 弓をつよく引てひやうと射たりければ(253・11)
- 尻をふたと蹴たりければ(388・16)
- 生けながら毛をむしらせければしほふたくとするを(165・5)
- 三尺ばかりなる鯨のふたくとして庭にはひ出たり。(373・10)
- 鼻はずれて粥の中へふたりとうちいれつ。(100・5)
- 毛の中より松茸の大きやかなる物のふらくと出できて(63・4)
- ふらくと飛びていぬ。(142・1)

- ふら〜と飛て皆いぬ。(144・14)
- しりをほうと蹴たれば(389・9)
- ほろ〜泣かる。(304・9)
- ほろ〜と泣きて(64・10)
- ほろ〜と物どもほれおつる物は(94・5)
- ほろ〜と泣しは(186・11)
- ほろ〜と打泣て(404・3)
- せなかは紅の練単衣を水にぬらして着せたるやうにみさ〜となりてありけるを(91・14)
- 三十すぢばかりむず〜と折り食ふ。(86・9)
- 人も住まぬうきのゆふ〜としたる一まちばかりなるうきあり。(360・2)
- ゆら〜とこの蛇行ば(360・2)
- さくりあげてよ〜と泣きければ(71・11)
- さくりもよ〜と泣く。(184・9)

右に見る如く、語種も豊富であると共に、特色ある語形のものが少ない。

(8) 『高山寺本古往来』孤存語彙

異なり語数は19語と少ない。擬声・擬態語が一例も存しない点、『法華百座聞書抄』に等しい。

- | | | | | | |
|----------|---------|-----------|----------|------------|---------|
| あたかも(1) | あに(1) | あひとともに(1) | あらかじめ(1) | いささかに(1) | いたりて(1) |
| いやしくも(2) | かつがつ(3) | かれこれ(1) | ことさらに(1) | しかのみならず(3) | しき |
| りに(2) | すこぶる(6) | すべからく(7) | とりあへず(1) | またまた(1) | もはら(5) |
| | | | | | や |

うやく(2) ややもすれば(1)

語種は多くないが、「すこぶる」「すべからく」「もはら」の使用頻度の高いことが注目される。

以上の、各文献ごとの副詞語彙の異なり語数は左の如くである。

207	字
150	古
92	法
79	光
67	打
60	却
60	高
49	三

最多の『宇治拾遺物語』と最少の『三教指帰注』とは大差があるが、両文献の言語総量に差があるので、単純な比較は出来ない。

右の異なり語数に占める擬声・擬態語彙の比率(%)は、左の如くである。

23.7	字
10.1	光
8.3	却
8.0	古
6.0	打
4.1	三
0	法
0	高

『法華百座聞抄』と『高山寺本古往来』の数値0は特別として、『宇治拾遺物語』の高率がきわ立っている。擬声・擬態の副詞語彙は、文献の文体的特徴を測る一指標となりうるのではないか。

おわりに

以上見てきたように、副詞語彙は、語義が抽象的・一般的であるほど共通度が高く、逆に、語義が具体的・特定のであるほど共通度が低くなる。擬声・擬態語は、その後者の代表的なものであるろう。

副詞語彙、就中、擬声・擬態副詞は、語彙史研究上のみならず、文体研究上、重要な地位を占めるものと考えられる

のである。

注

- (1) 拙稿「法華百座聞書抄の副詞語彙」(小林芳規編『法華百座聞書抄總索引』昭和五十年三月武蔵野書院刊)
- (2) 小林芳規編『法華百座聞書抄總索引』「本文篇」脚注一二三頁。
- (3) 「ちちと」「ひしと」については、小林芳規先生の『中世片仮名文の国語史的研究』(広島大学文学部紀要)特輯号3 昭和四十六年三月)にご指摘がある。

〔追記〕 本稿は、平成元年度鎌倉時代語研究集会に於いて口頭発表したものに基く。席上、小林芳規先生を始め、東辻保和・金子彰・鈴木恵の各氏から、貴重なご意見を賜った。記して深謝申上げる。

なお、本稿は、昭和六十三年度文部省科学研究費総合研究(A)「平安鎌倉時代語研究資料の総合的調査研究」による成果の一部である。